

# 東山魁夷がスケッチした地を訪ねる旅

- 蓼科高原・八島ヶ原湿原 日帰り紀行(1日コース) -

《郷愁》1948年

茅野

川が流れていた。兩岸の草のなびく堤の上は細い道になっていて、遙か遠くへと続いている。川が遠くの方で曲って消え去るあたりに、小さな橋がかかっていた。田園の向うに、ゆるやかな山なみ。

茅野から諏訪へ向って歩いて行くうちに、ふと、通りがかりに見た風景が私を捉えた。心を牽かれるままに簡単なスケッチをした。この全く平凡な風景の中に何があるのか。数日を経ても、意外に私の心に、その情景が根深く、静かな映像となって息づいているのを感じる。私の心を誘うように、深いところから呼んでいるものがある。

私はあの川の堤に腰をおろして、ぼんやり眺めていた時のことを想い起した。流れの音がささやきかけて、古い記憶を呼びさまそうとしているかのように 親しく、生き生きとしていて、それでいて、聞いているうちに眠くなるような、安らかで、ものうい響き。

山間の小さな小学校のそばで聞えてくるあの物音 授業中の窓から、きれいな声でいっせいに読本を読んでいる声 また、遊びの時間の校庭の、まるで森の小鳥達のさえずりのような、あの、ざわめき いや、それは、よく谷川のせせらぎの中から聞えてきた響きだ。静かな谷の石の上に腰をかけて、私はいつも耳を傾けていたものだ。しかし、あの川は田圃の中をゆるやかに流れ、諏訪湖に注いでいるはずだ。川はかすかな水音か、あるいは、むしろ無言で流れていたのではないか。

私は、いま、あの風景が私に向って語りかけていたものに気付いた。それは、故郷的なイメージとしてである。

放浪する者は故郷を遠く離れ、その心は絶えず流れ去って行く

ものに従い、休む時もなく青い山の向うへ牽かれてゆく。それでいて、常に探し求めているものは、心のやすらう場所 故郷ではないのか。私は横浜の海岸通りで生れ、神戸で少年時代を過ごした。きれいな川の流れる田園風景は、本来の私の故郷的なイメージではないはずだ。むしろ、港、船、赤煉瓦の倉庫などのほうが、記憶の底にいつも、はっきり映し出されている。

しかし、私の心の回帰するところに、もっとも普遍的な故郷のイメージ、小学校で歌った、「山は青きふるさと、水は清きふるさと」が浮び上ってきたのはなぜだろう。

港や船や倉庫は、私の心の奥の引出しの中に、しまい込んでいる故郷の姿であって、追憶の中での現実の風景であり、それは、私という人間の形成過程の上で、いつも、地底の泉のように、にじみ出てくるものであるが、私はもう一つ奥にある引出しの中身に気付いたのではないだろうか。それは、汽船や赤煉瓦とはちがって、きれいな水の流れる青い山の風景である。後者はより象徴的であり、より根源的であるといえるかもしれぬ。(中略)

私の心の引出しにある二つの故郷的なイメージは、私の遍歴の路にどんなふうに関わり交ぜられて行くのだろうか。そして、いま、戦後の荒廃の中で、私の心の向う故郷の象徴として、この川の流れる風景が静かに私にささやきかけてきたのではないか。

この風景を、私は制作することにした。小さい画面の試作をしてから、第四回日展(昭和二十三年)の出品作として準備を進めた。感傷に流れるのを恐れて、私は綿密な写生をした。大下図をその場所へ持って行って描きこんだくらいである。しかし、制作にあたっては、細かな描写を上から上から塗り込んで行って、青一色の模糊とした風景の中に、川だけをほの白く見せた。「郷愁」という画題をつけて出品した。この年以來、無鑑査出品の資格を得た。

『東山魁夷画文集第三巻風景との対話』所収「川のほとりにて」より

.....

《夕紅》1953年（個人蔵）

蓼科高原

湿地帯に夕陽が沈むころ、  
秋草が一瞬、紅に染まる。  
もうすぐ冬が来るので、  
賑やかだった山小屋の住人がどこかへ去ってしまう。  
秋空の彼方、  
渡り鳥の群れも小さく遠くへと消えてゆく。

『四季めぐりあい 秋』1995年

《夕明り》1972年（個人蔵）

八島ヶ原湿原

習作は長野県信濃美術館・東山魁夷館蔵

祈りの時が来た  
静かに鳴らせ つりがね草

『画集 白い馬の見える風景』1973年

《緑樹の岡》 1961年（個人蔵）

蓼科高原

岡は緑であった。  
どこを見てもすべて緑であった。  
路が一本、空の明るさを映して、岡の麓を繞（めぐ）っていた。

《緑響く》1982年（長野県信濃美術館・東山魁夷館蔵）

蓼科高原・御射鹿池

一頭の白い馬が緑の樹々に覆われた山裾の池畔に現れ、画面を右から左へと歩いて消え去った そんな空想が私の心のなかに浮かびました。私はその時、なんとなくモーツァルトのピアノ協奏曲の第二楽章の旋律が響いているのを感じました。

おだやかで、ひかえ目がちな主題がまず、ピアノの独奏で奏でられ、深い底から立ち昇る嘆きとも祈りとも感じられるオーケストラの調べが慰めるかのようにそれに答えます。

白い馬はピアノの旋律で、木々の繁る背景はオーケストラです。

『東山魁夷館所蔵作品集』1991年